

■第63回企画展

土偶まんだら

会期：平成24年7月14日(土)～8月19日(日) 会場：特別展示室

土偶とは、縄文時代に作られた素焼きの^{ひとがた}人形です。そのほとんどが女性の形を表現しています。

女性の形といっても、縄文時代は約1万年もの間続いたため、時期や地域によって異なるさまざまな土偶が作られました。

多彩な造形を通して、縄文人が土偶に託した願いはどのようなものだったのか、考えてみませんか。

■縄文人の心の世界—土偶まんだら—

縄文人は土器や石器などの日用品以外に、人の形を表した土偶や石棒なども数多く作りました。これらは日常生活の道具としてではなく、縄文人が何らかの祈りを形にしたものだと考えられています。

縄文人の心の世界は多彩です。土偶以外に土版、岩版、猪形土製品、キノコ形土製品、鐸形土製品、石冠などがあります。

このように、複雑に発達した祈りの道具は、縄文人の心の世界を表しています。その中の一員として、そして縄文時代を通して作られ続けてきたのが土偶です。



写真1 遮光器土偶 岩手町豊岡遺跡 [縄文時代晩期前半] 高橋昭治コレクション 当館蔵

■土偶は何につかう？

それでは、土偶はいったい何に使われたのでしょうか。明治時代以降、縄文文化の謎とされてきた土偶の役割は、どのような説があるのでしょうか。

考古学者は、まず土偶の形を分類しました。その結果、土偶はほとんどが女性の形だったこと、また、妊娠の表現があることから、安産祈願の護符説や、生命

を生み出し豊穡を願う地母神説が示されました。

さらに、ほとんどの土偶がどこか欠けていて、完全な形が少ないことから、土偶は意図的に壊されたものだと考えられるようになりました。壊された理由は、身代り説や、農作物の豊穡を願って村に破片をばらまいたと、世界各地の神話を用いて説明されることもありました。

一方で、土偶は破壊されたのではなく、壊れただけだと考える考古学者も少なくありません。

このように、土偶の使われ方には、さまざまな説があります。一体どの説が真実なのでしょうか。土偶が何に使われたのかを探る前提として、展覧会では二つの視点を示します。

どのような土偶がどのように移り変わっていったのか、そして、土偶は遺跡からどのように見つかるのか、展覧会を通して検証してみませんか。



写真2 縄文時代晩期の道具 岩手町豊岡遺跡 [縄文時代晩期前半] 高橋昭治コレクション 当館蔵

■土偶のうつりかわり

岩手県内で見つかった最古の土偶は、奥州市胆沢区休場遺跡の、高さわずか4.3cmの小さな土偶です。この土偶は上半身が欠けてなくなっていますが、下半身を見ると腹が少し膨らんでいます。



写真3 土偶
奥州市胆沢区
休場遺跡
[縄文時代早期]
岩手県蔵

このように最初から妊娠の形を示している土偶は、岩手県の範囲では数千年間作られ続け、縄文時代晩期には写真1のような遮光器土偶に変化します。

遮光器土偶だけを見ると、とても人には見えず、もしかしたら宇宙人？と思っている人もいるかもしれません。しかし、うつりかわりを追って行くと、祈りの形の変化を感じることができます。

■遺跡の中の土偶

土偶の役割を考える上で、欠かせないのは土偶が見つかった場所です。

縄文時代を通して、ほとんどの土偶は、土器や石器などと一緒に見つかります。使われなくなった土偶は、集落の全域からばらまかれた状態で見つかるのではなく、他の日常的な道具と一緒に捨て場に捨てられるのです。

しかし、縄文時代の終わりごろ、後期や晩期の土偶の中には、住居跡や、穴に

埋められた状態で発見されるものがあります。とても少ない例ですが、このような状態で見つかる土偶のほとんどは大形品です。また、埋められたということは、使用している状態を保っているため、完全に近い形のものが多くのが特徴です。

写真4は、土器と一緒に穴に埋められていた土偶です。右足が欠けていますが、ほぼ完全な形です。埋められた土偶は、縄文人が土偶をどのように扱ったのかを知ることができる重要な資料です。



写真4



写真4・5 刺突文土偶と出土状況
新潟県上山遺跡[縄文時代晩期末～弥生時代初頭]
明治大学考古学研究室蔵

■土偶へのまなざし

土偶の出土数は東日本が多く、中でも岩手は屈指の土偶多量保有県です。そのため耕作などで土偶が見つかることも多かったようです。身近にあった土偶の美しさは、昔から多くの人々の興味を惹きつけてきました。その一人が、昭和初期の一戸町で土偶複製に情熱を注いだ梅垣哲雄です。

梅垣哲雄は、土器や土偶の復原研究を続けました。現代では、出土資料を観察・分析し、幾度も作っては縄文人の製作方法を検証する、実験考古学という考古学の研究方法がありますが、昭和初期、既に実験考古学が行われていたのです。



写真6 梅垣焼遮光器土偶[現代]
個人蔵

昭和初期は各地で模造品が数多く作られ、本物として骨董商に並ぶこともありました。精巧な複製を製作できた梅垣哲雄は、本物と区別をつけるため、底に「梅垣焼」と刻印を記すようになりました。今では梅垣焼は昭和初期の秀逸な複製品の代名詞として用いられています。

美しい土偶が数多く残る岩手。今も昔も、身近で心惹かれる存在です。

(専門学芸員 八木勝枝)

もよおし

●記念講演会 7月22日(日) 13:30～15:00 当日受付・聴講無料
「縄文文化最大の謎『土偶』」 講師：岡村道雄氏 (奥松島縄文村歴史資料館名誉館長)

●考古学セミナー

講演会 8月5日(日) 13:30～15:00 当日受付・聴講無料
「立ちあがれ、土偶！」 講師：熊谷常正氏 (盛岡大学教授)

現地見学会 8月11日(土) 8:30～17:30 要事前申込み

花巻市内および周辺縄文遺跡を巡ります。 ※詳細は7月1日以降、博物館にお問い合わせください。

●たいけん教室 「土偶づくり」 7月29日(日) 要事前申込 ※詳細はインフォメーションをご確認ください。

●展示解説会 7月15日(日)・8月19日(日) 各回14:30～15:30 当日受付・要入館料